

<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 284 号)

「教育者・新島襄」 -6-

アーモスト・カレッジの特質ほか

井上勝也同志社大学名誉教授

◆アーモスト・カレッジの特質

さて、新島にとって、アーモスト・カレッジでの 3 年間は 9 年間の米欧生活中もっとも充実した時期であり、思想形成、人格形成上重要な時期でありました。当時のアーモスト・カレッジは 1862 年のモリル土地法によって農業、工業関係の専門職業教育を重視する州立大学が誕生する中で、リベラル・アーツ・カレッジ(liberal arts college) として全人教育を重んじていました。アーモスト・カレッジは将来の職業に直接役立つ学問を求めるのではなく、広く大自然の偉大な秩序や、国家や人間の本質を追究する学問を重んじ、知識を善用する主体の形成に重点がおかれ、品性(character)の陶冶を重視しました。教師と学生の人格的交わりを大切にし、ピューリタンの雰囲気のもと、知・徳・体の調和的発展を通して良き市民、紳士の育成を目ざす大学でありました。

◆岩倉具視遣外使節

新島は 1870 (明治 3) 年 7 月、アーモスト・カレッジを卒業し、同年 9 月からアンドーヴァー神学校に入学しました。カルヴァン主義を基調とするニューイングランド神学を学び、将来同胞にキリスト教を宣べ伝えんとするためであります。彼が神学校在学中の 1872 年 2 月末、岩倉具視一行の遣外使節がワシントンに到着し、新島は文部理事官田中不二麿の通訳を委嘱されました。彼は田中と 10 ヶ月にわたってアメリカを始めイギリス、フランス、ドイツ、スイス、ロシア、オランダ、デンマークの教育施設を見学しました。彼はこれら 8 ヶ国の教育視察及び教育制度の調査によって、彼の教育観は不動のものになりました。

彼はデンマークのコペンハーゲンから、恩人ハーディ夫妻に手紙を送り、その中で、「ヨーロッパの教育機関を訪れ、教育の偉大な価値を発見することによって、益々貴方の私に示された親切をありがたく思います。」(LIFE AND LETTERS OF JOSEPH HARDY NEESIMA p.150)と書いています。新島の9年間の米欧での生活を通して得た結論は、欧米文明を根底において支えているものは、キリスト教とデモクラシーと全人教育である、ということでありました。

◆宣教師就任

新島は1874(明治7)年7月、31歳でアンドーヴァー神学校を卒業しました。彼は神学校を卒業する3ヵ月前に、アメリカン・ボード(1810年に創立されたアメリカにおける最初の超教派的な外国伝道団体)の宣教師補となって祖国に帰り、キリスト教を同胞に宣べ伝えることを決心しています。最初に申しましたように、彼にとって教育とキリスト教の伝道は車の両輪でありました。同年10月、彼はヴァーモント州ラットランドでおこなわれたアメリカン・ボードの第65回年会で、10数年間胸に育んできた畢生の目的を初めて公けにしました。彼は祖国を近代化するためには、欧米の既成の文明を移入するだけでなく、祖国にキリスト教主義の大学をつくり、自治自立の人民を育成すること、このことこそ神の召命に応じ、祖国に報いることになると考え、聴衆に学校設立のための募金を訴えました。

◆帰国・同志社英学校開設

同年11月、新島は10年4ヵ月ぶりに祖国の土を踏みました。両親、親族のいる上州安中に着くや、早速キリスト教の伝道を開始しています。10年ぶりに帰国して、正月を両親、姉と過ごすことなく、1ヵ月後の年末には上京し、文部省で文部大輔田中不二麿に会い、学校設立について相談しています。彼は帰国1年後の1875(明治8)年11月29日、京都の地に同志社英学校を設立しました。当時宣教師たちは新島の考える近代科学を教え、カレッジ・レベルの学校を設立することには反対で、あくまで日本人伝道者の養成学校(training school)に徹することを固執しています。■